

# 「小さな家」シリーズと農村教育：『農業の教科書』と比較して

高野弘子

## I. はじめに

『高崎経済大学論集第62巻第3・4合併号』において、筆者は、ローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957) の書いた農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』 (*Missouri Ruralist*, 以降『ルーラリスト』と記述) の記事の内容が、農村生活運動 (Country Life Movement) の理念に基づいて、全米の農村生活普及事業を推進した、コーネル (Connell) 大学農学部教授であるリバティ・ハイド・ベイリー (Liberty Hyde Bailey, 1858-1954) の農業教育の思想と、大きな重なりを持つことを論じた。

また、ジョン・J・フライ (John J. Fry) は、農業新聞と農村教育との関わりについて、農業新聞の編集長や記者たちが、農村生活運動を推進する大学教授や農務省 (USDA) の職員たちと継続的に接触し (39-40)、読者に農村生活運動の考え方を伝える中心的な役割を担うと共に、農村の学校で農業を教えることを熱心に援助していたと述べている (41-42)。フライはさらに、ベイリーと同様に、セオドア・ローズベルト大統領 (Theodore Roosevelt, 1858-1919) が設置した農村生活委員会 (Commission on Country Life) の7人のメンバーのひとりで、農業新聞『ウォレスズ・ファーマー』 (*Wallaces' Farmer*) を発行するヘンリー・ウォレス (Henry Wallace, 1836-1916) が、農民の子どもに対して価値ある知識と同様に、農村生活への愛を教える公教育が必要であるとして、農村教育のあり方を唱えたことを示している (41-42)。

これらの先行研究から、ワイルダーの農業新聞『ルーラリスト』の記事が、農村教育と密接な関係を持つことが明らかとなった。注目したいことは、ワイルダーが、『ルーラリスト』に載せた記事と同じいくつかの内容を、「小さな家」シリーズでも用いている点である。ワイルダーは、1919年6月5日の記事に、11歳になる従兄弟のチャーリー (Charley) についてのエピソードを載せている。その内容は、父親とおじのヘンリー (Uncle Henry) が小麦の収穫のために忙しく働いている時、チャーリーは全く手伝いをしないどころか、面白がって大人たちをからかっていたので、本当にスズメバチに刺されて大変なことになっている時に、またいたずらかと思われて、すぐに助けに来てもらえなかったというものである。ワイルダーはこの記事を、良い市民を育てるためには、学校での教育、家庭での教育、母親の教育が大事であるとまとめている (Hines 187-88)。そして、ワイルダーは、このチャーリーの物語を、「小さな家」シリーズの第1巻『大きな森の小さな家』 (*Little House in the Big Woods*, 1932) で再び用いているのであ

る(199-211)。筆者は、ワイルダーが農業新聞の記事を書くことを通して農村教育に携わっていたことと、その農業新聞に書いたものと同じエピソードを、数年後に出版する「小さな家」シリーズの中でも用いていることから、同シリーズには、農村教育の要素が織り込まれていると考える。

一方、教育者であり農村生活委員会の委員長も務めたベイリーは、特に初等教育における自然学習を重要視し、その理論に基づく『農業の教科書』(*The School-Book of Farming: A Text for the Elementary Schools Homes and Clubs*)を出版した。ベイリーは、『農業の教科書』の巻頭の序文(Statement)で、「この本は農業という視点と農村生活という視点を子どもたちの精神に育成するためのものである」(v)と述べ、出版の目的が農村教育にあることを明記している。

本小論では、共に子どものために書かれたワイルダーの作品と、ベイリーの『農業の教科書』とを比較・分析することを通して、農村教育という新しい視点から、「小さな家」シリーズを再評価することをその目的とする。

## II. 20世紀初頭における時代背景と農村教育

1880年以降、工業生産額と農業生産額は逆転し、アメリカは農業国から工業国へと変貌した(佐々木「ベイリー」94)。この結果、工業地帯への人口の流入を引き起こし、20世紀初頭には若者の多くが農村から都市へと移動した。このような時代にあつて、農業問題に共感的理解を示すセオドア・ローズベルト大統領は、農村生活委員会を設置し、農村生活の問題点についての調査を命じた。この委員会の設置を発端に始まったのが農村生活運動であり、多くのアメリカ人が農村の状況や農村問題について関心を持つようになった(Peters 290, 292, 295)。農村生活運動家たちは、農産物を都市に提供し続けてもらう為に、農民が農村に留まろうと思えるように農村生活を魅力的にする方法を探った(Roth 2)。また、都市化の進んだアメリカの密集、犯罪、労働搾取、道徳の腐敗といった都市問題からも、農村生活への関心を高める必要性が強調された(Wunderlich i)。農村生活委員会は、教育が農村生活問題の中心であり、同時にその改善方法でもあるとして(Peters 308)、農村の学校に最も大きな関心を寄せた(Roth 3)。

この背景には、科学的農業の原理を中西部の農民たちに伝えようとしたのだが、農民が理科的原理の教育を受けたことが無かったことが原因で、十分な効果を上げられなかったという1890年代の農業科学の専門家たちの経験があった。そこで、農村生活運動家たちは、農民を育成するためには、農村の子どもたちに、科学的原理を理解する力をつけることが最良の方法であるという考えに至った。そして、初等農業を学ぶ以前の小学生たちが科学的原理を理解するための方法として、自然学習が提案された。この自然学習の中心的な提案者がベイリーであった(Fuller 155-56)。ベイリーは、自然学習により、子どもたちに農民の視点を教えること(*Nature-Study* 90)、農民の生活に触れる

こと (*Nature-Study* 93)、農場の生活を興味あるものにする事 (*Nature-Study* 107) の3点を重視した。

小学校で自然学習や初等農業を展開しようとするベイリーの熱望は、20世紀に入り、アメリカの教育を作り変えようとする公立学校の教育者たちの動きと一致した (Fuller 156)。彼らは、伝統的な3R'sである読み書き計算や機械的学習に重きを置く教育を軽蔑し、子どもの経験から始め、為すことによって学び、人生と関連付ける教育を提案していた。ベイリーは、農業や自然についての学習は新しい教育の別名だと述べており、特に中西部の教育者たちは、自然学習と初等農業を歓迎した (Fuller 157-158)。

この流れの中で、中西部の各州は続々と、農村の学校で農業の学習を推進させる法律を作り、新しい学習過程が準備された。たとえば、ミズーリ州のある郡では、1年生は育てること、2年生は作る事、3年生は生き物、4年生は土と家について学ぶという4年間の学習課程を作成した (Fuller 162)。農村生活運動家たちは、農村部の学校を統合し、自然学習と農業を通して、人生と教育とをつなぐことにより、子どもたちに農場に興味を持たせ、農場での生活を生き返らせ、若者を農場に留めおくことができると予測した (Fuller 165)。アメリカでは、1903年までに3,000人近くの小学校教員が自然学習の通信指導を受け、3万人近くの子どもが学校園で植物を育てるなど、自然学習は当時の学校教育においてある程度の広がりを見せた (和田 268)。

ところが、農民たちは教育と本とを結び付けており、人生と教育とをつなぐことについては知識もなかったし関心もなかった。そして多くの農民は自分の子どもたちが、貴重な学校での時間を学校以外でも学ぶことができる自然学習や農業に当てることは、時間の無駄であると考えていた (Fuller 167)。自然学習は教科というよりはむしろ方法であり、自然が教材であったため、教科書は無かったのだが (Fuller 156)、教育と本とを結びつける農民の傾向から、ベイリーは、1920年に初等農業の教育課程を学習する7年生と8年生のために、自然学習の理論を基に、『農業の教科書』を出版したと考えられる。

### Ⅲ. 「小さな家」シリーズと農村教育との関連

農村教育の観点である「農場と農民」「コミュニティー」「家」について、ワイルダーの「小さな家」シリーズとベイリーの『農業の教科書』を、比較・分析することを通して、同シリーズと農村教育との関連を探っていく。

#### 1. 農場と農民

農場と農民については、「小さな家」シリーズ第2巻『農場の少年』 (*Farmer Boy*, 1933) で、多くの内容が描かれている。同巻には、東部で豊かな農場を営むアルマンゾ (Almanzo) の父親が、鍛冶屋のパドック (Paddock) から、アルマンゾを自分のところに徒弟に出してはどうかという話を持ちかけられる場面がある (362)。アルマンゾの

父親は、アルマンゾ自身に、パドックの徒弟となるか、このまま農場に残り農民となるかを選択させるために、以下のように述べている。

自分で決めてほしいんだ。鍛冶屋のパドックの所へ行けば、ある意味で、楽な暮しができるかもしれない。天気を気にしなくていいし、寒い冬の夜も、若い家畜が凍えないかと心配することなく、ぐっすりとベッドで横になることができる。雨が降ろうが、晴れていようが、風が吹こうが、雪が降ろうが、屋内にすることができる。いつもたくさんの食べ物や着る物を持ち、銀行には預金がある。…しかし、物事には反対の側面もあるんだよ。町では、他人に依存して生きなければならない。手に入れるものはすべて、他人が作ったものなんだよ。ところが、農民は、自分自身と土地と天気だけを頼みにすることができる。農民は、自分自身で食べる物や身に付ける物を作り、自分の材木で暖を取る。一生懸命働くが、好きなように働くことができ、誰にも指図されることが無い。農場では、自由で独立していることができるんだよ。(369-70)

アルマンゾの父親の農業についての哲学が示されている部分であるが、これは、ベイリーが『農業の教科書』の中で述べている、農業という職業は、信念と独立独歩の能力を必要とするという内容と一致している(15)。

また、独立記念日に従兄弟のフランク(Frank)が1杯5セントのレモネードを飲んでいるのを見たアルマンゾが、5セントをねだった時、アルマンゾの父親は、財布の中から50セントを取り出し、その意味を語る場面がある。

50セントにはどういう意味があるのかわかるか。…50セントというのは仕事なんだよ。お金は大変な仕事を意味するんだよ。…お前はどやってジャガイモを育てるかを知っているよね。…半ブッシュェル(bushel, 約35リットル)のジャガイモを育てる仕事が50セントの中に詰まっているんだよ。(182-84)

父親の話聞いたアルマンゾは、父親が手に持つ丸いお金を見て、ジャガイモに関わるすべての仕事と比べて、その小ささを思ったことが描かれている(184)。そして、50セントをもらったアルマンゾはレモネードを買うのではなく、子豚を買い、それを育てることにした。父親からお金の意味、そして倹約を学んだ場面であり、父親の語る内容は、ベイリーが『農業の教科書』の中で示している農民に適する人は勤勉で倹約家であるという条件と一致を見る(15)。

また同巻には、アルマンゾの父親がジャガイモを売る際の様子が描かれている。ある

朝、父親は、マローン (Malone) の町に出かけるが、昼前に急いで家に戻り、家族にニューヨーク (New York) のジャガイモのバイヤーが町に来ていることを告げる。兄のロイヤル (Royal) はすぐに馬車の用意をし、アルマンゾと姉のアリス (Alice) は1ブッシェルのジャガイモの入るかごを持って、地下の食物貯蔵所へ急いだ。アルマンゾとアリスはかごにできるだけ速くジャガイモを詰め、それを兄と父親が馬車に積み込み町へ運ぶという作業を、何度も繰り返した。この作業は、早朝から夜遅くまで2日間続いた。その結果、ジャガイモは、1ブッシェル当たり1ドルで500ブッシェル売れ、父親は、500ドルを銀行に預金した。アルマンゾの家族は皆、良いジャガイモを育てるばかりでなく、いつまで保存し、いつ売ればよいかをよく知る父親を誇りに思ったことが描かれている(114-17)。『農業の教科書』の中で、ベイリーは、農民は農作物や家畜を育てるだけでは十分ではなく、それを売らなければならないことから、良い生産者であると共に良いビジネスマンでなければならないと述べているが(15)、アルマンゾの父親は、正に、これに当てはまる農民として描かれている。

ベイリーは、『農業のテキスト』の「農場と農民」の章で、人類の最も基本的で最も重要な職業は農業であること、農民は彼自身の能力と準備と努力により自らの地位が評価されること、農業という職業は、健康で体力があり、勤勉で儉約家であると共にビジネスの知識を持ち、仕事と人生を農場で過ごしたいという本物の願いを持った人々の天職であると述べている(13-15)。これに対して、「小さな家」シリーズ第2巻『農場の少年』では、農場とは何かがアルマンゾの日々の生活を通して示され、また、農民とは何かがアルマンゾの父親の姿を通して説明され、父親のような農夫になりたいと願う主人公アルマンゾと共に読者は、農民に対して尊敬の念を抱きながら物語を読み進めていくことになる。

「小さな家」シリーズは、主人公ローラが中心の物語であるので、アルマンゾが主人公である第2巻は無くてもシリーズとしては成り立つ。このため、フレッド・エリスマン (Fred Erisman) は『農場の少年』を「忘れられた小さな家シリーズ」(“ ‘Farmer Boy’: The Forgotten ‘Little House’ Book”)と呼んでおり、また、アン・ロマインズ (Ann Romines) は、「他のシリーズの作品に比べて満足感が少ない(2)」と述べている。しかし、農村教育という観点から見ると、この『農場の少年』は、欠くことのできない重要な内容を持つことが、ベイリーの教科書との比較から明らかとなり、だからこそ、ワイルダーは、「小さな家」シリーズ全8巻中の第2巻という早い段階に据えたと考えられる。

## 2. コミュニティー

西部開拓時代、フロンティアで人々が生き抜く上でコミュニティは無くてはならないものであった。コミュニティに関わる内容は、主に第2巻『農場の少年』以外の西部で暮らすローラの一家の物語の中で描かれている。

第6巻『長い冬』(*The Long Winter*, 1940)では、ダコタテリトリーを襲った長い冬を乗り越えるために取ったコミュニティーの協力が示されている。大雪により鉄道が止まってしまったため、東部から物資が届かなくなり、コミュニティーは食料不足に直面した。このままではコミュニティー全体の食糧が底をついてしまうであろう時、アルマンゾとキャップ・ガーランド(Cap Garland)は、町の南に住む農民が小麦を収穫し備蓄しているという情報を頼りに、吹雪のおさまった日を狙い、往復40マイルの道のりを荷馬車で小麦を買い付けに行く(264-99)。幸い2人は、この農民の家にたどり着き、交渉の結果、小麦を手に入れ、コミュニティーへと戻り、長い冬を一人の餓死者も出さずに鉄道が再開するまで持ちこたえたことが示されている(300-16)。アルマンゾとキャップは、コミュニティーで商店を営むロフトス(Loftus)から買い付けのお金を受け取って、危険を顧みずに出発したのだが、彼らが無事戻ると、ロフトスは、高い代金で小麦を売ろうとした。しかし、コミュニティーの中でこれからも商売をしていく上で、地域住民を正當に扱うことの大切さに気付かされ、妥當な値段で皆に小麦を売ることにする。これは、コミュニティーの浄化作用を示している(304-07)。

第7巻『大草原の小さな町』(*Little Town on the Prairie*, 1941)では、アルマンゾの姉であるイライザ・ジェーン・ワイルダー(Eliza Jane Wilder)が教員として働くが、児童とうまくいかず問題が起きる。その時、コミュニティーの教育委員会が学校を訪れ、児童たちに、「ワイルダー先生の言うことをよく聞いて、行儀よくするように。私たちは良い学校を望んでいる」(180)と述べ、コミュニティーが学校の運営の援助をする姿が描かれている。

また、学校を会場に、地域の人々が集まり、農作業のない冬に、人々のレクリエーションとして文芸会(Literary)が発案され、つづり字競争(spelling match)などが行われたことが描かれている(216)。この文芸会は、毎週金曜日の夕方に開催されることが、地域住民の意志で決定され、つづり字競争の他にも、バイオリンの演奏、独唱、牧師の伝道、賛美歌の合唱(221-39)を行うなど、活動内容も発展していった。また、児童・生徒による学芸会(School Exhibition)も行われ、ローラの妹のキャリー(Carrie)が詩の朗読を、ローラとクラスメートのアイダ(Ida)は、前半と後半に分かれてアメリカの歴史について発表した(283-97)。ローラの発表は、喝采を受け、新しい学校のために教員を探していたルー・ブリュースター(Lew Brewster)の目に留まり、後に教員採用試験を受け、教員の道へと進むきっかけとなっていく(298-307)。

第8巻『この楽しき日々』(*These Happy Golden Years*, 1943)では、採用試験に合格したローラが、教員として、ブリュースターの家に下宿をしながら、学校で教える様子が描かれている。ブリュースターは、妻と息子の3人で暮らす農民で、町から遠く離れた開拓地で暮らしている。学校は町から12マイル以上離れており、また、雪深い冬季であることも重なって、自宅から通うことが不可能であったローラは、ブリュースター家に下宿をすることになるのだが、学校で教えること以上にローラを悩ませたのは、ブ

リュースター夫人であった。家事の手伝いを申し出ても無視することから、ローラが、下宿することを歓迎していないことを知る(7)。ローラは、夫と口論する夫人の姿から、生活に不満をいただいていることを感じる(7)。ローラが下宿を始めた2週目、リュースター夫人は、部屋の掃除も、ベッドメイキングもせず、料理も2日に1度するだけで、髪もとかさない状態であった。リュースター夫人は、結婚する前は東部で教師をしており(10)、東部へ帰りたくて仕方がない。夫との夫婦喧嘩の原因もすべてそこにあった(47)。下宿3週目、夫人はとうとう夫と喧嘩さえもせず、常に沈黙するようになる(59)。5週目、ローラは吹雪のため、学校へは行けず下宿に一日中いることになるのだが、その夜、夫人は包丁を振り回す(64-66)。ここで、描かれているのは、夫に従い東部から、開拓地である西部に移住してきたリュースター夫人の孤独である。町では、コミュニティーで文芸会のような活動が立ち上げられ、人々が交流の機会を持っているが、町から遠く離れて暮らすリュースター夫人は、参加することが困難であった。男性は扶養者として家の外で働き、女性は妻、主婦、母親として家を守るべきものとするヴィクトリアニズムの考え方が浸透していた時代にあつて、わずか4軒が点在して暮らす雪深い辺境の地からの外出はままたらいものであったと考えられる。デビッド・B・ダンボム(David B. Danbom)は、リュースター夫人よりも後の時代である、1923年の時点においてさえ、町からほんの3マイルしか離れていない場所に住む農村女性が、1年間、他の女性と会う機会を全く持たなかったと報告している(Danbom, *Resisted Revolution* 10)。したがって、リュースター夫人の孤独な姿から、人と人をつなぐコミュニティー活動が、農村生活においていかに重要であるかを知ることができる。

以上述べてきた通り、アルマンゾとキャップが危険を覚悟でコミュニティーのために小麦の買い付けに出かけて行った行為は、ベイリーが『農業の教科書』の中で示している「コミュニティーは、人々の結束を強め、人々が自分自身を超えて助け合うことを導く」(149-50)という内容を具体的に表している。また、学校で問題が起きた時に、コミュニティーの教育委員会が学校を訪れてその運営の援助をしたことや、冬の週末に学校を会場に文芸会が開かれたことは、ベイリーが『農業の教科書』の中で述べている「民主主義において、教育は、公共の必要としてすべての人々によって支えられ、管理されなければならない」(146)という考え方の具体的な例と見ることができる。さらに、町から遠く離れているという地理的条件や、当時のヴィクトリア的女性観などにより、コミュニティーの活動に参加することが困難であったリュースター夫人の孤独から、人と人が結びつくことの大切さが、逆説的に例示されていると考えることができる。

ベイリーは、子どもたちにはコミュニティーの人々がどう生き、そして、コミュニティーがそれをどう支えているのか、地域がどのように統治されているのかについて知ってほしいと述べているが(*Training* 151)、ワイルダーの「小さな家」シリーズでは、彼女の経験を基にコミュニティーのあり方が描かれている。

### 3. 家

ワイルダーの書いた物語は、インガルス一家の大草原での日々の生活が描かれているので、「大草原」シリーズと呼ばれてもよいのだが、ワイルダーは、自身の作品を「小さな家」シリーズと呼んでいる。第1巻と第3巻のタイトルに「小さな家」という言葉が用いられており、また、シリーズ全体でも主人公の家に対する心情が多くの場面で表現されている。

第1巻『大きな森の小さな家』では、冒頭の章で、大きな森にある小さな家はとても心地よい家であることが示されている(4)。そして、第2章でも、外は雪で寒いけれども、丸太小屋の中は暖かく快適であると述べている(38)。最後の章では、居心地のよい家の中に、父親と母親と暖炉の光と音楽が今あることがうれしいというローラの家に対する心情が語られ、第1巻の物語が終了する(238)。

第6巻『長い冬』には、激しい吹雪のために、児童が学校から集団で帰宅する場面がある。ローラとキャリーも、途中で遭難しそうになりながら何とか家にたどり着く(84-95)。冷え切った体をストーブの前で暖めている時、ローラは、風や寒さから避難できる安全な家がどんなに素晴らしいかを感じる。そして、今、自分がいる場所よりも天国がいいところであるとは想像できないと思ったことが描かれている(94)。

第8巻『この楽しき日々』では、前に述べた通り、ローラは学校で働くためにブリュースター家で下宿をするのだが、週末だけは、アルマンズの厚意で遠い雪道を送り迎えしてもらって自宅に帰ることができた(34-40)。全く会話のないブリュースター家で日々を過ごしていたローラは、週末に我が家に戻ると、夕食のテーブルで、食べ物よりも楽しい会話に飢えている自分に気づいたことが描かれている(34)。また、父親がバイオリンで演奏する行進曲や、甘い恋の歌や、楽しいダンスの曲を聞いて、あまりの幸せな気持ちに感極まる(35)。そして、「おはよう」という言葉が、朝をよいものにするということ(35)、自分たちがこんな素敵な家を持っていることがどんなに幸運であるか(35)ということに気づき、今のように毎日暮らせること以上に望むことは何も無いと思うのだ(40)。

一方ペイリーは、『農業の教科書』の中で、農業の最終目的は何かについて以下のよう

農業の最終目的は何なのだろうか。良い作物を育て、沢山の家畜を飼育することか。いやそうではない。お金を儲けるだけのためか。いやそうではない。大きくて最良の農場を持ち魅力的な建物を持つことか。いやそうではない。町で一番の農民と呼ばれるためか。いやそうではない。最良の個人の家庭生活を創り出すためか。そう、実はこれが最終目的なのだ。他のすべてのことは望ましいことではあるが、より良い家とより役に立つ市民を創り育てることに中心がおかれるのであれば、ほとんど価値を持たない。家は人生である。家にこそすべての宝が、

すべての希望が、そしてすべての神聖な思い出が存在するのだ(373)。

つまり、ベイリーは、農業の目的が、より良い家庭生活を創り、より役に立つ市民を創ることに中心がおかれると述べ(373)、他の職業と違い、農場で暮らす農民は、職業と家庭を同時に育成するので、農場と家とは1つであるとしている(373)。これに呼応するかのように、ワイルダーの「小さな家」シリーズは全巻に渡り、農民であるインガルス一家及びワイルダー一家の、温かな最良とも言える家庭生活とその中で子どもたちが役に立つ市民となるよう育っていく姿が描かれている。開拓農民として様々な困難に出会い、一度も大きな農場や、立派な家や、十分なお金を持つことは無かったインガルス一家ではあったが、ベイリーが農業の最終目的として示す「最良の家庭生活を創り出す」(373)という観点から見ると、父チャールズ・インガルス(Charles Ingalls)は成功した農民であったと捉えることができる。ベイリーが「家」を『農業の教科書』の最終章に持ってきて、最も重要な章として取り扱っていることと共鳴するかのように、ワイルダーは「小さな家」シリーズの中心テーマを家に据えている。

これまで、ワイルダーの「小さな家」シリーズの中で描かれている内容とベイリーの『農業の教科書』の内容とを比較・分析してきた。その結果、ワイルダーの「小さな家」シリーズは、『農業の教科書』の「農場と農民」「コミュニティー」「家」の各章で扱われている農村教育の重要な要素が、物語の中に織り込まれていると結論付けられる。

#### IV. おわりに

ベイリーが、農村生活向上のために精力的に農村教育に力を注いでいる一方で、前にも述べた通り、農民たちは教育と本とを結び付けており、多くの農民は自分の子どもたちが、貴重な学校での時間を学校以外でも学ぶことができる自然学習や農業に当てることは、時間の無駄であると考えていた。農民たちは自分の子どもに農民になってほしいとは、必ずしも望んでいなかった。それよりは、むしろ、どんなことであれ自分が望む職業についてほしいと思っていた。そして、学校での自然学習や農業の授業が、子どもたちを農場に留めるために立案されていると感じ取っていた(Fuller 167)。

このような状況の中で、ベイリー自身も、自然学習だけでは、農業への興味を目覚めさせ、農業を再建するには十分ではないと考え(Nature -Study Idea 109)、著書の中で、文学の重要性について言及している。

私たちは農場の生活あるいは農場の人々の史実の記録を持っていない。良い農村生活を発達させることに大きな影響を与えた北米の人々の伝記的な資料を探そうとした時に、その欠如を強く感じた。これらの人々の伝記は一般的な伝記の中に

は出てこない。その結果、理想となる農業や農村生活に関する前例が、少年少女の前に示されないことになる。子どもが読むことができるのは、他の職業の人々の伝記ばかりである。しかし、実際は、伝記の中に名前を残さない人々こそが、真に国家に影響を与えた人々である。これらの人々こそ、若い世代が憧れるヒーローとしてリストアップされるべきである。(Training 41-42)

また、当時、小説の中で、多くは風刺的に描かれていた農村生活について、活気のない表現ではなく、画家が、筆で力強い輪郭で描くのと同様に、短く、鋭く、素早く、直接的な言語により、生き生きと表現する新しい文学が必要であるとも述べている(Outlook 19)。

ベイリーは、自然科学では欠落しがちな、人々の精神に訴えかけることのできる文学や伝記を取り入れることで、教育を総合的に紡ぎたいと願っていた(Training 152)。そして、著書の中で、「精神は生き続ける」(Nature-Study 6)、「精神は知識より重要である」(Nature-Study 49, 66)と精神の重要性について何度も繰り返すと共に、「祖父母の精神は私たちが聞くべき何かを持っている」(Jack 57-58)と述べている。ベイリーは、軽んじられてきた農村の人々の偉業や、その精神を伝える魅力的な文学に期待を寄せていたと考えられる(Outlook 86)。

『大草原の小さな家』(Little House on the Prairie, 1935)は、「今のおじいさんやおばあさんがみんな、小さな男の子や女の子や赤ちゃん、またはまだ生まれてさえいなかったずっと昔」(1)という書き出しで始まる。「小さな家」シリーズは、伝記の中に名前を残すことのなかった多くの開拓農民の一人であった祖父や祖母の子ども時代の物語であり、ベイリーが求めた、農民の精神と農村生活が生き生きと表現された文学であると考える。

「小さな家」シリーズの発売元であるハーパー社(Harper)は、子どもたちがワイルダーに宛てて書いた手紙を集めた『親愛なるローラ』(Dear Laura)という本を出版している。子どもたちは、手紙の中で「小さな家」シリーズに対する感想も綴っている。

ペンシルベニア州モイラン(Pennsylvania, Moylan)に住むアーシュラ(Ursula)は、1942年に、「私は農村部に住んでいますが、農場で暮らしたいと思っています。私はアルマンゾが好きです。私も馬がとても好きだからです」(Dear Laura 18)と述べ、馬が好きなので農場で暮らしたいという思いをワイルダーに伝えている。

また、ニューヨーク州シュラクユース(New York, Syracuse)に住むガイ(Guy)は、1947年に、「ぼくが、あなただったらいいのと思います。混雑した都市で暮らす代わりに、広々とした大草原で走ったり遊んだりしたいからです。ダッグアウト(dugout)に、ぼくも住んでみたいです。ゆっくりとさざ波の立つ小川は、きっと美しいに違いありません。干し草の山を滑り降りたり、大草原の放牧場で、大きくてのんびりとした牛を追うのを見たりするのは、どんなにか楽しいだろうと思います」(Dear Laura 80)と書いて

ており、農村に憧れを抱いていることがうかがわれる。

ワイルダーも関わった農村生活運動や農業新聞は、1920年以降衰退し、彼女自身も記者の仕事から1924年に離れている。ダンボムは、衰退の原因について、農業の非効率により農産物価格が高く維持していたため、農業の効率をよくなり農産物価格を下げようという狙いで、人々は農村教育に大きな関心を向けていたが、1920年以降、農産物価格が下がったことにより、農村生活運動家たちは危機感を感じなくなり、したがって、運動も弱まっていったのではないかと述べている(“Rural Education Reform” 474)。

農村生活運動家と一言で言っても、そこには、様々な人々が、様々な思惑で参加していた。ある者は、農村人口が減ることにより農産物の供給が十分でなくなり、農産物価格が高騰することを恐れて参加し、またある者は、農村に暮らす農民の生活を向上させると同時に、人々の農村への関心を高めたいと願い参加していた。共に西部の農村で生まれ育ち、農民に共感する心を持つベイリーとワイルダーは、後者に属する農村生活運動家であった。前者に属する農村生活運動家が多数であったことから、運動は弱まっていったが、後者に属する運動家たちは、運動の目的はいまだ十分達成できているとは言えず、農村教育が下火となっていくことに懸念を抱いていたと考えられる。ベイリーが、1920年に、『農業の教科書』を出版したのは、前にも述べた通り、農民が本と教育とを結びつける傾向にあったということに加えて、農村教育が下火となりつつある中で、その精神を子どもたちに継承して伝えていくために、教科書という形で残そうとしたことによると考えられる。一方ワイルダーは、世の中の流れが、農業社会の価値観から都市文化の価値観へと、ますます塗り替えられていく中であって、人々に農村生活への関心を高めることを目指す農村教育の視点を「小さな家」シリーズの中に織りこもうとしたのではないかと考えられる。

ベイリーが子どものための農村教育で重視したことは、子どもたちに農民の視点を教えること(Nature-Study 90)、農民の生活に触れること(Nature-Study 90)、農場生活を興味あるものにする(Nature-Study 107)の3点であった。子どもたちの感想から、「小さな家」シリーズは、ベイリーが重要視した、農民の視点を教え、農民の生活に触れさせ、農場での生活に興味を持たせることに、物語を通して貢献していると考えられる。つまり、ベイリーが、『農業の教科書』の出版目的として記した、「農業という視点と農村生活という視点を子どもたちの精神に育成する」(v)という農村教育の哲学が、表立っては表れていないが、底流に静かにそして着実に流れ続けている「小さな家」シリーズは、農村教育という観点から再評価することができる作品であると結論付けたい。

(たかの ひろこ・高崎経済大学非常勤講師)

## 参考文献

Bailey, Liberty Hyde. *Cornell Nature-Study Leaflets*. Albany: J. B. Lyon, 1904.

- . *Report of the Commission on Country Life*. New York: Sturgis & Walton, 1917.
- . *The Country-Life Movement in the United States*. New York: Macmillan, 1911.
- . *The Harvest*. New York: Macmillan, 1927.
- . *The Nature-Study Idea*. New York: Macmillan, 1909.
- . *The Outlook to Nature*. New York: Macmillan, 1915.
- . *The School-Book of Farming: A Text for the Elementary Schools Homes and Clubs*. New York: Macmillan, 1920.
- . *The Training of Farmers*. New York: Macmillan, 1909.
- Banks, Harlan P. "Liberty Hyde Bailey 1858-1954." Washington D. C.: National Academy of Sciences, 1994.
- Campbell, Stephen Michael. "Early Congressional Efforts, An Early Philosophy of Agricultural Education." 2020年4月6日 <<https://education.stateuniversity.com/pages/1744/Agricultural-Education.html>>
- Clifford, Daniel. 2015. "The Life and Legacy of Maria Montessori." 2020年3月25日 <<https://www.springmontessori.com/wp-content/uploads/2016/02/The-Life-and-Legacy-of-Maria-Montessori.pdf>>
- Connors, James J. "Liberty Hyde Bailey: Agricultural Educator and Philosopher." *NACTA Journal*, December, 2012.
- Danbom, David B. "Rural Education Reform and the Country Life Movement, 1900-1920." *American History*, vol. 78, no. 3, 1979, pp. 462-474.
- . *The Resisted Revolution: Urban America and the Industrialization of Agriculture, 1900-1930*. The Iowa State University Press, 1979.
- Davis, Benjamin Marshall. "Agricultural Education: State Organizations for Agriculture and Farmers' Institutes." *The Elementary School Teacher*, vol. 11, no. 3, The University of Chicago Press, 1910, pp. 136-145.
- . "Agricultural Education: Textbooks." *The Elementary School Teacher*, vol. 11, no. 10, The University of Chicago Press, 1911, pp. 517-527.
- Dear Laura: Letters from Children to Laura Ingalls Wilder*. New York: HarperCollins, 1996.
- Dewey, John. *My Pedagogic Creed*. New York: E. L. Kellogg & Co, 1897.
- Erisman, Fred. "'Farmer Boy': The Forgotten 'Little House' Book." *Western American Literature* 28, vol. 28, no. 2, 1993, pp. 123-30.
- Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dream of Laura Ingalls Wilder*. Pierre: South Dakota Historical Society Press, 2017.
- Fry, John J. "'Good Farming-Clear Thinking-Right Living': Midwestern Farm Newspapers, Social Reform, and Rural Readers in the Early Twentieth Century." *Agricultural History*, vol. 78, no. 1, Agricultural History Society, 2004, pp. 34-49.
- Fuller, Wayne E. "Making Better Farmers: The Study of Agriculture in Midwestern Country Schools, 1900-1923." *Agricultural History*, vol. 60, no. 2, 1986, pp. 154-168.
- Hillson, John. "Agriculture in the Classroom: Early 1900s Style." *Journal of Agricultural Education*, vol. 39, no. 2, 1998, pp. 11-18.
- Hines, Stephen W. *Laura Ingalls Wilder Farm Journalist*. University of Missouri Press, 2007.
- . *Little House in the Ozarks: A Laura Ingalls Wilder Sampler The Rediscovered Writings*. Nashville, Tennessee: Tommy Nelson, 1991.
- Jack, Zachary Michael. ed. *Liberty Hyde Bailey: Essential Agrarian and Environmental Writings*. Ithaca: Cornell University Press, 2008.
- Jellison, Katherine. *Entitled to Power: Farm Women and Technology, 1913-1963*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2017.
- Keppel, Ann M. "The Myth of Agrarianism in Rural Educational Reform, 1890-1914." *History of Education Quarterly*, vol. 2, no. 2, 1962, pp. 100-112.
- Peters, Scott J. "'Every Farmer Should Be Awakened': Liberty Hyde Bailey's Vision of Agricultural Extension Work." *Agricultural History*, vol. 80, no. 2, 2006, pp. 190-219.

- Paul A. Morgan. "The Country Life Commission: Reconsidering a Milestone in American Agricultural History." *Agricultural History*, vol. 78, no. 3, 2004, pp. 289-316.
- Romines, Ann. *Constructing the Little House: Gender, Culture, and Laura Ingalls Wilder*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1997.
- Roth, Dennis. "The Country Life Movement." 2020年6月20日 <[http://snakeroot.net/farm/CountryLifeMovement\\_1900-1920.pdf](http://snakeroot.net/farm/CountryLifeMovement_1900-1920.pdf)>
- Shoemaker, Audrey Renee. "The beginnings of agricultural education in Midwestern rural schools, 1895-1915." Iowa State University, Master theses, 2010.
- Swanson, Merwin. "The 'Country Life Movement' and the American Churches." *Church History*, vol. 46, no. 3, 1977, pp. 358-373.
- Wilder, Laura Ingalls. *By the Shores of Silver Lake*. 1939. New York: HarperCollins, 2004.
- . *Farmer Boy*. 1933. New York: HarperCollins, 2004.
- . *Little House in the Big Woods*. 1932. New York: HarperCollins, 2004.
- . *Little House on the Prairie*. 1935. New York: HarperCollins, 2004.
- . *Little Town on the Prairie*. 1941. New York: HarperCollins, 2004.
- . *On the Banks of Plum Creek*. 1937. New York: HarperCollins, 2004.
- . *The Long Winter*. 1940. New York: HarperCollins, 2004.
- . *These Happy Golden Years*. 1943. New York: HarperCollins, 2004.
- Wunderlich, Gene. "Two Essays on Country Life in 20th Century America," 2004 Annual Meeting, August 1-4, Denver, CO 20178, American Agricultural Economics Association(New Name 2008: Agricultural and Applied Economics Association).
- 伊藤博「教育の理念—教育の歴史及び思想の外観—」『大手前大学論集』16号, pp. 1-19.
- 宇佐美寛「L・H・ベイリの「自然学習」—アメリカ進歩主義教育運動の農本主義的側面—」『千葉大学教育学部研究紀要』18, 1969, pp. 43-55.
- . 訳『自然学習の思想』東京:新興印刷, 1972.
- 門脇正俊「小学校教師養成における農業学習の意義」『年報いわみざわ:初等教育・教師教育研究』10, 1989, pp. 8-18.
- 齊藤潔『アメリカ農業を読む』東京:農林統計出版, 2009.
- 佐々木保孝「コーネル大学における農業拡張の組織化」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第52号, 2003, pp. 69-77.
- . 「L. H. ベイリーの農業拡張論」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部, 第50号, 2001, pp. 93-100.
- 末原達郎「人間にとって農業とは何か」『宗報』11・12月合併号, 2016, pp. 42-53.
- 高野弘子「ローラ・インガルス・ワイルダーと農村教育:『ルーラリスト』の記事とリバティ・ハイド・ベイリーの農村生活運動の思想を比較して」『高崎経済大学論集』第62巻, 第3・4号合併号, 2020, pp. 67-83.
- 常松洋「アメリカのヴィクトリアニズムと中産階級」『京都女子大学紀要・史窓』第58号, 2001, pp.159-170.
- 寺川智祐「小学校低学年理科の特性とその教育的意義:初等理科成立過程からの一考察」『科学教育研究』vol. 12, no. 4, 1988, pp. 128-136.
- フランクリン・エム・レック 高原義男訳『4Hクラブ物語』東京:関書院, 1956.
- ポール・ジョンソン 別宮貞徳訳『アメリカ人の歴史 III』東京:共同通信社, 2002.
- 保田恵莉「幼児教育の追求とモンテッソーリ教育」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第22号, 2014, pp. 49-57.
- 山本智也「デューイの教育思想が家庭教育支援にもたらすもの」『言語文化研究』4号, 2014, pp. 29-39.
- 和田貴弘「『自然学習』の環境教育における意義について:L.H.ベイリの自然学習の検討」『北海道大学研究論集』14, 2014, pp. 267-283.

## *Little House* Books and Rural Education: A Comparison with *The School Book of Farming*

TAKANO Hiroko

### Summary

In my former research, I showed that Laura Ingalls Wilder's articles in the *Missouri Ruralist* had influence from the ideas of the country life movement led by Liberty Hyde Baily, a Cornell University agricultural professor and chair of the Commission on Country Life appointed by Theodore Roosevelt. I assumed that *Little House* books, written by Wilder for children, also might have connections with Bailey's philosophy of agricultural education. I compared *Little House* books with Bailey's *School-Book of Farming* written for children as rural education. I picked up three crucial aspects of rural education; farm and farmer, community, and home, and compared Wilder's books with Baily's textbook. The result was that their idea about farming was the same. Both described that farmers were the essential occupation, the community had important roles in the country, and the purpose of farming is to develop the best personal home life. Bailey put the home as the closing chapter in his textbook, and Wilder set the home as her books' theme. From this comparison, I conclude that *Little House* books have the aspects of the rural education which Bailey hoped to teach children.